

■学校経営のポイント

新年度の「3日」「3週間」「3ヵ月」

喜名 朝博

新年度、新1年生とともに多くの新規採用教員が初めの一步を踏み出した。学校の一員として長い目で育てていきたい。そのためには「節目」を意識することが重要となる。

人や組織は、区切りや節目を意識することで、行動や意識が変わりやすくなると言われる。「三日坊主」という言葉があるように、「3」という数字が重要な節目となる。学校においても「3日」「3週間」「3ヵ月」を節目として意識したい。

学校の組織文化を知る3日間

人は新しい環境に入ると、「ここではどう振る舞うべきか」を懸命に観察し、その環境に慣れようとしていく。いわゆる「学校の組織文化」を知る時期でもあり、最初の数日で見えた周囲の行動が、その組織の「当たり前の基準」として記憶されていく。そして、この記憶がデフォルトとなり、これからの教員生活を貫くことになる。

とくに新卒の教員にとっては、それまでの人間関係や行動様式、価値観がリセットされ、新たな人間関係や社会人としての価値観がつくられていくことになる。心理的安全性の確保を前提に、新採教員のデフォルトを丁寧に整えていきたい。「そんな常識」「知っていて当然」は禁物である。

授業の質を決定する3日目以降

3日目を超えると、本来の行動パターンに戻り始める。ちょうど授業が始まる頃に楽な道を選ぶようになると、それがその教員の授業の質となってしまう。そこで、万全の準備をして子どもたちの前に立てるよう

支援していきたい。それは大きな自信となり、「学び続ける教師」としての好スタートを切ることにもつながる。

教員としての生き方が決まる3週間

3週間を超えると、自分の授業や校務の進め方の「型」が見えてくる。ここでは独善的にならないように、他者からの評価やアドバイスが重要になる。子どもたちの反応を見ながら試行錯誤することは価値あることだが、その「型」が子どもたちの主体性の発揮に逆行するようなものであれば、教育的価値について共に考え、言語化を手伝うことが必要である。

教員として成長するには、日々のリフレクションと他者から学ぶ姿勢が欠かせない。ここで先輩教員に必要なのは、否定や断定ではなく、共に考えることである。子どもたちと同じように「教師の学び」にも伴走者が必要なのだ。

教員としての生き方を再考する3ヵ月目

本音が出せない4月、余裕のない5月、6月になって初めて本音を出し、他者の支援が意味をもつようになる。理想と現実のギャップが見え、自分の指導を客観視できるようになり、また離職を考えたり、精神的に不安定になったりするのもこの時期である。初めて「自分はどんな教師でありたいのか」と本気で考え始めるようになるのが3ヵ月目である。

ここでの支援のポイントは、内省によって理想と現実を言語化させ、教員としての生き方を再考させ、価値づけていくことである。

(きな・ともひろ=国士舘大学客員教授/元全国連合小学校長会長)

まずはここだけ押さえておこう!

法規から実務まで学べる 学校管理職の教科書

【著】宮澤一則／四六判／定価 2,310 円



本の詳細およびご予約は、上のQRコードより小社ホームページをご利用ください。

